

翻 訳

ヘルマン・バウジンガー

ドイツ人はどこまでドイツ的？（1）

— 国民性をめぐるステレオタイプ・イメージの虚実と因由 —

河 野 眞（訳）

[解題]

ここに訳出したのは、ヘルマン・バウジンガーの『典型的にドイツ的：ドイツ人はどのようにドイツ的？』の一部である。はじめに書誌データを挙げる。

Hermann Bausinger, *TYPISCH DEUTSCH・Wie deutsch sind die Deutschen?*
München: C.H. Beck 2000, 4. Aufl. 2005.

ヘルマン・バウジンガー（1926年生）はドイツ民俗学界を代表する一人で、特に民俗学という学問分野に変革を促した理論家・改革者として知られている。1961年に刊行された最初の主要著作『科学技術世界のなかの民俗文化』は、ドイツ語圏の民俗研究への批判の上に提示された新たな指針であった（英語訳1990年とイタリア語訳2006年の他、日本では拙訳2001年／2005年がある）。はじめ1959年にテュービンゲン大学に提出されたこの教授資格申請論文は、すでにタイトルが独自の問題意識を表しているが、発表当時の反響も大きく、以来世界各国の民俗研究に刺激をあたえてきた。

目下の話題に絞ると、国民性というテーマは、特にどの分野の担当と決まっているわけではないが、ここでは論者の専門領域が背景になっている。それは巻末の参考文献表によく表れている。そこには、独自の社会理論をそなえたノルベルト・エリーアスの歴史理解や、ユルゲン・ハーバーマスの公共性の考察など広く知られた諸作、それに純然たる統計資料も挙げられてはいるが、特色ある個別研究となると大多数が民俗学のモノグラフィーである。因みに、民俗学の特徴となると、歴史に消長した際立った個性や突出した事件を重く見るのではなく、普通の民衆の思考や行動に光を当てることが旗印として掲げられる。その標識からすれば、この分野が国民性論に伸びてゆくのは不思議ではない。むしろ民俗学は広い意味で国民性の解明を課題とすると言ってもよい程である。しかし、そこにはそこでハードルがあり、陥穽もひそんでいる。概括的に言えば、民俗学は、ものごとを意味付けするに当たって、過去との繋がりを言い立てる。それが本領であり強みでもある。たしかに、昔の人々がどのように生き、いかに考えたかを明らかにすることは忽せにはなし得な

い。国民性と呼ばれる集団的な心理・行動の特質が長い年月をかけて形作られた面があるだけに、時を遡る探索が不要であるはずがない。しかし他方で、現実生きる人間が、どこまで過去に支配されているかは疑問である。その点で、これまた傾向を挙げるなら、民俗学は現代を直視するには不得手と言わなければならない。現代の民衆生活を把握する上での概念や術語も整ってはいない。現代を取り上げても、過去の村落生活を説明するための用語を用いて間に合わせていることも屢々であるが、また間に合わせであることへの認識も今一つである。今日各国でパウジンガーが注目される度合いが高まっているのは正にこの故で、日常生活の場で過去と現代がどのように関係し合うかについて考察が深められたからである。またそれがドイツ語圏を対象にした個別事例の分析を超えて、一般理論の水準となったからでもある。

以上は、専門領域との関わりに触れてみた。ここで提示される個々の論点については、受けとめ手それぞれの反応があるろうが、社会や文化の伝統に根ざす要素と現在の趨勢の両方にバランスよく目配りされるのは、この著者ならではの視座であろう。本書は、一般書として執筆されたこともあって、同じ著者の書き物のなかでは平易な叙述となっている。しかし論点の多くは、パウジンガーが民俗研究の領域で予て説いてきたところと重なる。たとえば「ドイツ人は三人よれば一クラブ」の一節は、村の寄合や隣人組のような古くからの、いわば自生的な集団ではなく、近・現代に本格化した種類の社会形成に留意して民俗・民衆文化を理解すべしとの見解を背景にしている。「自然と歴史」についても、専門分野のなかでそれに照応する大きな考察がひかえている。特にこの一節などは、それを踏まえれば著者の年来の主張として受けとめることができるが、ここでは端折り過ぎているきらいがあり、大方の読み手に果たしてすんなり通じるであろうかとの懸念も起こさせる。ともあれ、ドイツ人によるドイツ人論の新しい一作である。

本書はその刊行年次が示すように、21世紀へ移行する直前辺りの執筆だったようである。以来ほぼ毎年新しく刷られている。話題作なのであろうが、それには、昨今、EU（ヨーロッパ連合）が拡大を遂げ密度を増している状況も関係していよう。多文化の併存・混合のなかで、さまざまな局面で調整の必要性が高まっており、そこから改めて各国の国民性、とりわけステレオタイプ・イメージが一般的にも話題になっている。事実、本書は、書誌案内などでは、その分野の基本書の一つとして挙げられるのである。

本書は4章から構成されるが、訳出・紹介では、第二章から始めることにした。第一章は国民性を論じることをめぐる方法論なのである。

また訳出にあたっては、原題の直訳とは微妙に異なるが、「ドイツ人はどこまでドイツ的？」とした。日本語として意味の多重性を考えたつもりである。併せて、これをどの分野に位置づけるかを明らかならしめるために、説明的なサブタイトルをつけた。

最後に、本誌への訳出・掲載にあたっては、著者と出版社の好意的な配慮を得たことを付記する。

第二章：国民性の検証

1. お国料理 — 食と飲み物への寸評	3
2. 狭くても気楽なのが……	9
3. 同じ所に住み続け、そして旅行が大好き	15
4. くつろげるのが何より	21
5. ドイツ人は三人寄れば一クラブ	(以下次号)
6. 自然と歴史	
7. 規則は生きることの半分	
8. 冗談が分かるの？	
参考文献	
訳注	

1. お国料理 — 食と飲み物へのコメント

ドイツを旅行し、国際的なホテルが立ち並ぶ^{ニュートラル}区画(だけのことではないが)に足を踏み入れるや、そこで<お国名物>(Nationalgerichte)や<お国料理>(Nationalspeisen)に出会うのは昔も今も変わらない。これらの言葉はメニューに載っており、ボーイ(おそらく地元の間人であろう)もお品書きのなかのそうした特別料理を勧めしてくれる。しかし、この<お国料理>あるいは<お国名物>といった表現は何を意味するのだろうか。国・国民(Nation)の概念は、今日では、通常、独立した国家を指しているのだから、まずはドイツという国の料理になろう。ところが、事実はまったく別である。料理メニューのなかの地域的、それも多くは狭域的な特殊なものがお国料理として名指される。一般には広まっていない食べ物、あるいは少なくとも独特のヴァリエーションにその名称を冠せられることが少なくないのである。例えばミュンスターラントの<トットヒェン>(Tottchen:子牛の頭肉のこったりしたシチュー/ラゲル)、あるいはヴェストファーレンの<盲の鶏>(Blindhuhn:ベーコン、ジャガイモ、玉葱、豌豆、人参、林檎、梨を煮込んだ一人用鍋料理)だが、これらの名前は他の地域では知られていない。名前だけでなく、その名称で呼ばれる料理は、食材の取り合わせが特別なことにおいて、また香辛料が特殊なことにおいてその地方に独特である。

もっとも、お国料理という言葉が過度に突っつくのも、いかななものか。それは、こうした言葉をつかう人たちも、例えばミュンスターラントあるいはヴェストファーレンを国

家と見ているわけではないからだけではない。それは、むしろ特殊な語法である。しかし、それには背景もある。すなわち、ドイツという国が理念にとどまり、政治地図が多数の小国家や極小国家に細分されていた時代への集団的記憶を含んでいる面があるからである。料理の特殊性への示唆は、食物における地域的差異が現に存することへの冷静な確認であることに加えて、一種の〈お国自慢〉とも結びついている。ここで言うお国自慢とは、その地域への誇り、すなわち特定の風土と特定の間人種と特定の歴史的特質に属することへの自認である。

そうは言っても、厳密に決められた地域へのシグナルである旗やワッペンにおけるような明瞭な帰属性ではない。これに属するのは、北ドイツの諸地方で広くおこなわれている^{ニッ}鯨料理や、具の組み合わせとニュアンスに差異が多い一人用鍋料理であり、あるいは南ドイツ各地における塩漬けキャベツとベーコンないしはソーセージの組み合わせである。他面では、一般的には、一地域におけるお国名物があるだけではなく、多かれ少なかれ典型的とされる料理の一式がある。

ドイツでも最北部に典型的なのは、魚料理の他には、チリメンキャベツや赤キャベツといった丈夫で地味な野菜を使った食事である。それだけでなく、シュレスヴィヒ=ホルシュタインの〈デブの音楽〉¹と言うインゲン豆、豌豆、人参、葱、ジャガイモ、ベーコンの一人用鍋料理は、特徴のある料理がもとめられるときにはよく挙げられる。同じく、メイン・ディッシュでは、〈豚のあばら詰め〉がある。豚の腹に詰めるのは、焼いたスモモ、あるいはその他の焼いた果物である。ここに、ドイツの北部および西部地域の独自性が表れている。つまり、こってりした食材に甘いものを添えるのである。ポメルンやメクレンブルク、すなわちドイツの北東域では、団子にスモモを併せ、インゲン豆に林檎を取り合わせ、サラミソーセージに干し葡萄、鶯鳥の炙り肉に焼き林檎や焼きスモモを組み合わせる。ヴェストファーレンでは、黒パン、すなわちライ麦パンに甘いものを添える。ザールラントやヘッセンの一部では果物ケーキとジャガイモ・スープが一緒に出るが、これは他の地方では縁がない一品である。ライン地方では、ザウアーブラーテン（酢または赤葡萄酒に漬けた牛肉の炙り肉）に干し葡萄と林檎漬けを合わせる。

特殊な名物料理としては、豚肉を使う〈ケルン風ザウアーブラーテン〉があるが、もちろんケルンの人間なら誰もが好むというわけではない。これからも分るように、地方のお国料理は高級料理に由来するのではない。多くの人々が入手しやすい食材が特殊な位置を占めるようになったのである。同時に、大都市はその属する地域に組み込まれるのが原理と言ってもよいが、またその枠内で独自の味覚を発展させてきた。たとえばベルリンは独自の食文化を作り上げた。よく分かるのは、ブーレット（ミートボールの一種）、つまりボール状の挽肉を焼いたもので、ベルリンのスナックのスタンドで供される。他にも、ベー

コン入りの豌豆スープ、鰻の野菜煮込み、焼き鯿、鯿巻き（ロールモップス：塩漬けニシンの半身を調理加工して巻いたもの）、種々のアスピック²もベルリン料理となっている。

南へ下るに連れて、小麦粉で作る料理が比重を占めるようになる。シュヴァーベンでは、マウルタッシェがお国料理である。薄いうどん粉で作った袋で、その中に肉とパン、それに屢々ほうれん草の混ぜ物を詰める。付け合せとしてよく使われる〈シュペッツレ〉もメリケン粉の一品で、温かく作って、ディッシュの底地に使うのが特色である。団子は、シュヴァーベンやバイエルンではパン粉で作ることが圧倒的に多く、中部ドイツの他の地域ではジャガイモ団子であるのと相違する。バイエルンでは、さまざまかたちで〈パンの時間〉があるのが典型的で、それはおやつであるが、正餐がそれに当たることもある。また大根を細切れと言うより丁寧に切り込んで、まるで小さなハーモニカのような形状にしたものや、特徴ある数々のチーズ、さらにレバー・ソーセージや白ソーセージなどのソーセージにも独特のものがある。

以上のリストはもちろん委曲を尽くしたと言うには程遠いが、これだけでも充分多彩である。この簡単な整理からも、地方的な多様性が強い印象をあたえるであろう。その際、自然条件という前提が重要な役割を果たしていることは言うまでもない。それは北ドイツの海岸地帯では魚料理が定着し、また（もう一つ事例を加えるなら）上部ライン地方の砂地質の地域ではアスパラガスの栽培が盛んであることを見ても分かる。しかし政治的・歴史的な影響力も無視できない。その赴くところ、一つには、料理のなかには地域的なヴァリエティと解してよいだけでなく、特定の空間を特徴付ける特色となっているものも少なくない。正に〈お国料理〉となっているわけである。二つ目に、料理や嗜好の区分を見ると、政治的・歴史的経緯から説明できるものが確かにみとめられる。

これが当てはまるのは、こつてりした料理につける甘い添え物であろう。それは特にドイツの北部や西部において見られると言ってもよい。事実この点では、ドイツ全域を通じての明瞭な嗜好の区分が走っている。南ドイツの人は、北ドイツの家庭で甘いサラダを出されてびっくりする。この二分について明確な説明は難しい。しかしこれには、ドイツの北西域が、植民地からの輸入品に対してより多く開けていたことと関係するようである。砂糖は、18世紀末までは、主に蔗糖から得られており、輸入品は高価であった。それゆえ砂糖は、上層であることのプレステージの品物であったが、大商社が取り扱うようになり、また政府の後押しもあって、広く一般民衆のあいだにも普及した。さらに19世紀に成立した甜菜の栽培とそれをもとにした精糖工業も、先ずドイツの北西域に集中し、ややあって中部ドイツにも広まった。

この推移と並行するのは茶の輸入であり、その売買金額は莫大であった。これをめぐる経済活動にはイギリスの植民地支配の影響が殊に強く、ダイナミックな流通システムと一

体になっていた北ドイツに多く集中した。今日、東フリースラントとそれに属する島々は、茶の消費ではドイツで最も重要な地域である。そこでは、朝昼夜とも茶がたっぷり飲まれる。しかも氷砂糖と生クリームが一緒である。東フリースラントの茶の消費は、ドイツの他の全域の平均に対してほとんど10倍にもなる。そこにコーヒーが、これまた植民地物産として北西ドイツが起点として入り込んだ。とは言うものの、大量かつ急激な浸透の結果として、コーヒーについては北と南の間に、嗜好においても消費においても本質的な差異はみとめられない。

北のジャガイモ料理と南の小麦粉料理の対比も、歴史に根ざしたところがある。その区分は、甘味と酸味の嗜好の区分とほぼ重なる。もちろん時間が経過するなかで、出入りは起きた。南ドイツでもジャガイモは食され、北ドイツにも小麦粉を使う素晴らしい料理がある。しかし、ジャガイモが北でより多く普及し、高い評価を得てきたとは言い得よう。因みに、ジャガイモは南アメリカからスペインとイタリアを経てヨーロッパへ渡来したが、すぐに一般的な食材となったのではなかった。決定的な刺激は北西から、すなわち主導的な貿易国であるイギリスとオランダからやって来た。ジャガイモ栽培への働きかけは先ずプファルツとザクセンで受け入れられ、ややあって特に北ドイツに広まった。政府による奨励もあったが、特にプロイセン国王フリードリヒ2世³がジャガイモ栽培を勧めたことはよく知られている。それに較べて南ドイツでは、19世紀になってもジャガイモは貧民の食べ物とみなされていた。経済学者フリードリヒ・リスト⁴は、〈ジャガイモ農民〉に農業における最下層を見たものである。

近代がさらに進むと、〈ジャガイモ〉の語は特別の意味をもつようになった。外国の若者たちのあいだでは、ジャガイモというレッテルは端的にドイツ人を指すものとなった。それも、突き放して攻撃的に用いられてきた。またそれを口にする者たちの連帯のシグナルにもなった。それはちょうど、ドイツ人から見た場合にイタリア人を特徴付けるニックネームが〈スパゲッティ〉であり、それはそれでリアクションが予想されるのと照応する。またドイツ人に対するより古いからかいの呼び名で、食べ物を尺度にしたものには〈キャベツ〉(クラウト)がある。第二次世界大戦中、西側の新聞は、この〈キャベツども〉の困窮と破滅という言い方を好んで行なった。そうした外からの呼び方に共通するのは、内部から見ると大きな意味をもたず、精々下位に位置づけられる食材、しかし名指された人々のなかでは広く普及している食材が選ばれることである。その限りでは、むしろ食材のなかでもシンプルな種類が呼び名とされることに甘んじるのは、決して不思議ではない。

ドイツ人の食習慣の特徴もまた槍玉に挙がることもあり得る。地方に関する記録で、住民のあいだの料理慣習を取り上げたもの場合は、版で捺したように言及されるのは、実

質的な家庭料理，すなわちこってりした料理である。少なくとも，その地方の証明としての機能を果たす料理の場合，洗練された調理技法はめったに話題にならないのは注目すべき事実である。一般的に言えば，田舎の食べ物である。それらが，市民の台所にも浸透しているものであることは確かであろう。上流の人士や家庭も，その地方の習俗から遊離していたわけではないからである。

簡素な食事は，単に料理の習慣そのものだけのことではなく，広く食文化をも規定する。既に1820年代に，カール・フリードリヒ・フォン・ルーモール男爵⁵は，簡素な食事に重要なアクセントを置いた。同時代のフランス人ブリヤート=サヴァラン⁶と同じく，彼もまた中庸を重んじた。しかしブリヤート=サヴァランが洗練されていることによる過度への防衛を見たのに対して，ルーモールは過度の洗練に危険を嗅ぎとった。それは，詰まるところ，＜浪費の大食い，あるいは食道楽＞へ進むというのであった。簡素な食を是とすることは長くアンチ・フランスの性格を帯び，また国民的な自意識の表れであった。そうした簡素な食事は，ナチズムのなかでは信奉にまで高められた。種々の食材のごった煮（野菜，ジャガイモ，メリケン粉製品，ときには魚肉まで）は，ドイツの田舎では普通であった。また全般的な儉約の表現でもあった。1933年には，^{アインツプフ}一人用鍋物⁷は民族共同体⁸のシンボルとなり，上から決められ＜一人用鍋物の日曜＞の諸日には，民族体の同志たちが集うことが指示された。かかるイデオロギー的な思い入れは消え去り，やがてドイツ人の食への姿勢は多彩にして絶えざる変化をみせるようになった。幾度も版を重ねた料理雑誌，新聞の料理コラム，テレビの料理番組は，それを明瞭に物語っている。しかし少し注意すると，ドイツでは，実質的で＜自然な＞食事への愛好が，隣り合う他の諸国よりも著しいことが判明する。

ドイツ人について外国でカリカチュアに使われる紋切り型のイメージの一つは，1リットル・ジョッキを手にする男の姿であろう。それは多くの外国人の頭のなかに焼き付けられている。事実，ドイツではビールの消費は莫大である。もっとも，1人当たりの消費量では，コーヒーに較べて数リットルも劣るが，それもこのイメージを僅かに相対化するに過ぎない。なぜなら，ビールを飲む人は限られているからである。ビールを飲むのは圧倒的に男性である上に，ワインの少ない土地という条件も加わるからである。もっとも，ワインの消費量もまた大きい。ワインは決して食事に付くだけでなく，夕べのひとつきにも楽しまれる。そのひとつきが食事につながってゆくこともあるが，それはビールや他の飲み物でも同じである。

飲み物の文化が愛着をもって守られているのは，このイメージに沿っている。地方にはそれぞれのビールがあり，都会のスナックではさまざまな銘柄が提供される。ケルシュすなわちケルン・ビールは，ミュンヘンやドルトムントの宮廷御用達ビール⁹とは趣が異

なる。コマーシャルでは、昔ながらの伝統に沿った醸造であることが強調される。ベルリンではアルコール分の強い飲み物が出されるとき、〈昔のベルリン風のブランデーとリキュール〉との口上が付いてくる。面白いことに、アルコール飲料のなかには、綽名（と言うのは意味が疑わしいからである）が付いているものが散見される。たとえばバルト海沿岸には〈パリサイ人〉¹⁰ という飲み物がある。コーヒーと強いラム酒を混ぜ合わせたものが、甘い生クリームの下に隠れている。名前の由来は、（本当かどうかは分からないが）ある洗礼のお祝いの集まりに遡るとされる。牧師も招かれた会席で、集まった者たちはコーヒーのカップを次々と空にし、しかも飲むに連れて陽気になるのだった。最後に、飲み物にはコーヒーよりラム酒の分量が多いことに気づいた牧師は、連中をパリサイ人と罵ったと言うのである。また東フリースラントでは〈東^{オスト}フリースラント地葡萄酒〉があるが、実態は穀物でつくった焼酎である。あるいはまた、〈ボンツォップ〉（豆のスープ）と言い立てられるものの中身はブランデーと干し葡萄である。

これらは小話めいた片々たる現象だが、ドイツ人は呑み助という一般に流布しているイメージと符合する。ところで、ドイツ人は本当に酒飲みなのだろうか。手元の数値データで比較する限り、そうしたステレオタイプ・イメージもまったく根拠が無いわけではない。もっとも、他の工業国家と較べてアルコールの消費量が特に多いとか、愛飲家の割合が格段に高いとか言うのではない。ただ差異を挙げるなら、ドイツ社会では、大酒呑み、時には度を越した飲み方がプラスの意味で特別視されてきた経緯があり、それは部分的には今もつづいている。食べ物に見られるのと同じ傾向、すなわちこったりしたものへの愛好、質よりも量を優先させる姿勢が、飲み物でもあきらかに認められるのである。

その原因を探し当てるのは困難である。ノルベルト・エリーアス¹¹は、「ドイツ人の研究」のなかで、アルコールへの偏愛を大きな歴史的脈絡のなかにおいた。ドイツ語圏の国々は、脆弱であるために、絶えず戦乱にさらされた。飲むことに、すなわち社会的に大目に見られた飲酒に、エリーアスは、政治的無力の代償を見たのである。人々が、その社会的苦境をより耐えられるものにしようとしたのは明らかであろう。たしかに、それによって一つの原因は指摘したことになる。加えて、経済的な要因もあった。規模の大きなビール醸造所や葡萄山はたいがい領主の所有であり、それゆえ領主が消費を奨励したのである。さらに、集い合う文化は、ドイツでは他の国々に較べると、圧倒的に男性の文化であった。そのため軍事的な色彩の儀礼が強くなり、それがアカデミックな生活や市民の付き合いにも影響した。逆に、繊細や洗練はほとんど求められなかったのである。

しかし、飲酒の習慣には（食べ物も似ているが）社会的格差がまったく表れないとまで言うのは誤っていよう。〈ワイン、それともビール？〉は、しばしば社会的ステイタスを問うことでもある。ワインは上流の飲み物であり、ビールはむしろ庶民の飲み物である。

もつとも、それも一概に言えない面がある。ワインとビールのどちらにするかを決めるのは、地方の伝統にもよる。また昔も今も、ワイン地帯とビール地帯という差異も見られる。非常に一般化して言えば、何がお国料理や国の飲み物を挙げるのは、そもそもたやすいことではない。今日のドイツ社会にとって全般的な特徴となっているものを問うなら、むしろピザとプロセッコ¹²であろう。どの品が現実に普及しているかの面から言い出せば、これらこそ典型的にドイツ的と言わなければなるまい。しかしそれでは、納得がゆくまい。歴史のオーラもなければ、他の国々との差異のメルクマールにも欠けるからである。

2. 狭くても気楽なのが…

何世紀にもわたって地方的な独自性が形成・維持された後に、ようやく多彩な諸傾向が交流に至り、やがて統一性が強まる——政治構造の論理に根ざした展開を言えば、こうなるだろう。それが当てはまるのは生活の諸分野だけではない。他の部門でも同様である。典型的なドイツの家屋をもとめるなら、先ずは、地理学者や民俗学者が解明した諸々の家屋風土に注目することになる。そこでの典型とは、言い換えれば多様性でもある。ドイツでは、昔から部族的な差異が語られてきた。たとえば、古ザクセンの^{ハレン}広間家屋¹³、フランケン地方の重ね式家屋¹⁴、バイエルンの農場家屋¹⁵である。しかし建築の形態を実質的に決定したのは、何よりも各地方の風土や気候、また建築に使うことができる材料の違いであった。それに法的な面からの影響も加わった。たとえば南西ドイツでは、シュヴァルツヴァルトや上部シュヴァーベン¹⁶の豪壮な屋敷作りは、一子相続によって送り継がれてきた。他方、ヴェルテムベルク中部をはじめとして、分割相続の諸地方では、畑地が細切れになっただけでなく、農民家屋もまた小さくなった。それに対して都市の市民家屋の場合、差異は主に建築資材の違いと、中心になる建築様式のためであった。例えば、低地ドイツの煉瓦作りのゴシック様式に対して、南ドイツはバロック様式という具合である。

ある種の統一性をもたらしたのは、建築会社であった。彼らは、その時々の様式によって同一の資材を用い、類似の建築スタイルを推奨した。ハンブルクの賃貸シアパートと、シュトゥットガルトやミュンヘンの賃貸シアパートとの違いはごく僅かである。同じことは、都市や村の周辺部につくられた住宅団地や小規模な一戸建て住宅にも当てはまる。外国からの訪問者は、しばしばそれらを典型的にドイツ的とみなす。その際、外国人が意識するのは外観だけではない。特定の生活スタイルのイメージもそこには重なっている。家々は厳密に遮蔽されている。一般的に言えば、家屋の前に設けられた前庭はたのしくコミュニケーションする場所ではなく、整然と手入れされた美のデモンストレーションである。果樹が植えられ、また特にきちんと区分された縁取り花壇には草花が育ち、芝生は芝

刈り機で短く刈り込まれている。こうした庭の造りはステイタスを表わすが、それでいながら外部からはほとんど見えない。地面は垣根や生垣や、ときには塀によって閉じられているからである。

もつとも、やや限定的ながら、生い繁るがままの庭もないわけではない。しかしそうしたところへ外国人は行かない。また他の国々でも仕切りを設ける志向はみとめられる。デンマークでは屋敷家屋の持ち主は自分の地所を高い生垣で囲い、そのため〈イボタノキ・ファシスト〉¹⁶などと陰口をたたかれる。したがって、垣根や囲い作りは決してドイツ人の独創ではない。にも拘らず、外国人は、殊にいきなりインタビューされたときなどには、そうした感想を決まって口にする。特に北アメリカの人々には、ドイツ人の独自性として強烈に映るようである。一例としてドイツの大学に学ぶ外国人の女子留学生を対象にしたインタビューがあるが、アメリカ人の女子学生はこう述べた。〈皆な仕切りを作っているの、垣根とかや生垣とか……どの土地もお隣にはつながっていないの、夏だったら覗いても何も見えなじゃないの〉。20年以上も前になるが、アメリカのジャーナリスト、ジャック・マックイヴァー・ウェザーフォードは、囲い作りのさまざまな形態に因んでドイツ文化を論じた。

ドイツを歩けばすぐに気づくことだが、土地も野も建物も整然・厳密に区画されている。町も村も幾何学的な細片に区切られ、その細片を明らかにするための壁や生垣や門が数限りなく設けられている。地面の小片も明確な境界にかこまれ、隣接するどの地所からも切り離されている。小さな町でも、家々は一つ一つ規則的な囲壁で分離され、この壁で囲まれた地所のなかにまた壁があって、前庭と家屋、家屋と中庭が明確に分離される。そして家屋には巻き上げブラインドが設けられて、あたかも砦である。そのなかは堅固なつくりの家であるが、そこではまた頑丈な戸が部屋々々を切り離しているのが普通である。ドイツ人の家屋に入るに当たっては、三重の関門を突きつけてようやくたどり着くことも、決して珍しくない。その関門は機械式や電気式の装置で防御するようになっている。ドイツ人は、どんな空間でも、そこが開くと見るや、超え難い壁で囲む唯一の人々である。

オスカー・ネークトは、ある批判をきかせたスケッチのなかで、有名な狼と七匹の仔山羊を取り上げて、同じような特質を指摘した。戸は内側と外側を分け隔てると共に、善と悪をも分離する。また、ドイツ人のなかでは〈内部へ向うのは温かく注意深くあること〉、片や〈外部へ向うのは冷氣となげやり〉であると言う。もちろん、そうした大雑把な分け方は怪しい。しかし、区画的な思考、〈私たち〉と〈他の人々〉というカテゴリーの

操作をすでにプライベートな次元でも身に付けているという指摘は、あながち否定できない。目を惹くのは生垣と囲壁だけではない。通過する規則も研ぎ澄まされている。より直裁に言えば、何らかの平面や道や空間に入ることを禁じる標識のいかに多いことか。それに加えて、外国人が批判的に挙げるのが、ドイツにおける窓の錠戸、巻き上げブラインド、厚地のカーテン、レースのカーテンである。戸の重要性も指摘される。それは、生活はるかに外に向いている南の国々（フランス、イタリアなど）からドイツを訪れた人だけのことではない。もっとも、ドイツの閉じた戸については彼らにも理解できる場所がある。気象条件が、思い切った開口部を禁じるのである。ドイツ人の戸との関わりに不審を抱くのは、特に北米の人々であろう。彼らのあいだでは、ビジネスの空間でもプライベートな場所でも開け放った戸が原理であるが、ドイツ人の場合は戸は安全設備であり、防衛であり、コントロールの関門として機能している。昔も今も、ごく普通の戸のノックも珍事として受けとめられてきた。ホテルの二重ドアは先ずは騒音を防ぐためであるが、期せずしてドイツ人の性向に合致する。大部屋のオフィスはドイツでは比較的新しく、またその普及も緩慢である。会社のなかでも、会長か社長が、自ら出向いて経営の哲学を一席ぶつや、ふたたび重役室のあるフロアへ引揚げるといふ光景は幾らも見ることができる。

<ドイツ人にとって空間は神聖な何ものかである> — もっともこの場合の空間ラウムとは自分の部屋ラウムを意味している。ともあれ、こう定義づけたのは、文化人類学者エドワード・T. マイルドレッド・R・ホール夫妻であった。ニューメキシコ州出身の夫妻は、アメリカ人とドイツ人のビジネス上の交流に際して助言をあたえてきた。因みにここで言われる<神聖な> (heilig) は、その意味通りに受けとめてよいわけではない。自分の部屋を能う限り邪魔されずかき乱されないようにしておきたいという姿勢である。であれば、何ゆえドイツ人がことさらそれを言い立てられるのであろうか。どの文化の人間にも当てはまることではなかろうか。さらに、社会生物学的な基本欲求として動物の世界でもみとめられるものであろう。行動に関する研究者は、少なくとも高等動物については、テリトリーを区分し、マーキングをし、顕著な縄張り行動を示すことを証明している。しかし、人間は、本能性の勝った縄張りに生きるのではなく、複雑な社会的過程の結果としての多様な空間に生活する。人間において縄張り行動への志向があることを調べるとしても、その種の行動もそれぞれ文化的な変容を遂げたものであることが重要になる。境界と区分へのドイツ人の志向は、生態学者、すなわち行動学の研究者の観察結果が、ここで特に人間社会に引き写されたことによるのであろう。行動学者のそうした所見は、プライベートな区分傾向を説明してくれるだけでなく、よそ者を社会的・政治的に区分づけることが自然で不可避の行動であるともみとめてくれる。

区分づけと排除として観察されるところのもの、それは別のパースペクティブでは狭さ

として現れる。広さへ向う開口を欠いているところでは、狭さを特徴とする構造と生活形態が生成する。事実、外国人（この場合は北米人ばかりではない）は、ドイツ人の狭きシンドロームを何度も指摘してきた。それに属する個々の小局面を挙げると、鷹揚の欠如、住居に家具調度を詰めこみ過ぎる傾向、細分化された判断、コミュニケーションには不安をいだいて躊躇することなどである。これらはいずれも、主に外部から指摘される非常にネガティブな特徴である。しかしそこには、ポジティブなものへ転換する可能性もひそんでいる。鷹揚の欠如は自足として現れ、またコミュニケーションへの恐れは適度に控えめであることを意味しよう。ドイツ人を全体として狭さと関係づける限りでは、ドイツ人自身は狭さに苦しんではいない。あるいは、苦しんでいるばかりではない。ドイツ人はそこに自分を合わせてもいる。〈狭くても気楽なのが、広くて苦しいのよりも、ずっとまし〉(Eng und wohl ist besser als weit und wehe) とは、言い古されてきた諺である。

狭さという分母でくくれるものは、ある程度までは、非常に長期にわたって小空間の経験に限られていたという政治的条件から説明できよう。ドイツはかなり遅くまでほとんど一千もの領邦に分割されており、そのためそこに下属する者は、勢いお上と狭い生活空間に縛られていた。多数のものは農奴あるいは地主貴族に直接的に責務を負う存在であった。〈自由民〉ですら、生きる上での重要な問題、例えば結婚や定住の権利や老齢や貧困への手当てでは、地域的あるいは地方的な定めに依存していた。たぶんそれ以上に重要なのは、多数の矮小な領邦のなかの状況であった。特にシュヴァーベン¹⁷の町村体の内部などがそうであるが、そこでは役職の人員が厚いピラミッド組織を形づくっていた。そして彼らは、自己の行為、つまり片々たる権力行使に際しての決定を、世界の重大事のようにみなすことに慣れていて、早く16世紀初めに、人文主義者ハインリヒ・ペーベル¹⁷は、村長に選ばれたシュヴァーベンのある農民について報告している。自分の村のその役目についた彼は、〈不肖それがし田夫野人でありながら…… 今般図らずもかかる高さ役職に推戴されしこと〉を理解し得ないほどであった。その役職において彼が差配をする農民は9人であった。

政治的な小空間について取り上げたのは、純然たる歴史的問題のためではない。矮小空間としての地域を尺度とする振る舞いは、小国家システムが克服され昔の境界が消滅した後も生きつづけた。それが生きつづけたのは、古い極小の政治的まとまりのなかで、特殊な文化的様相が形作られたからである。フランスでは、パリの吸引力、すなわち首都の政治的・文化的優位が圧倒的であったため、多少大雑把な言い方になるが、パリ以外のすべては田舎であり二流に格下げされていた。もちろんドイツでも、辺鄙な、政治的にも文化的にも遅れた地域がありはする。しかし地図を見ても分かるように、やや大きめや、やや小さめの多数の中心地が点在している。そのため田舎^{プロヴィンツ}と雖も、依存的ではない。そもそも

ドイツに田舎はない、という考え方ができたのにもある程度正当性がある。しかしこの誇張は、都会の生活形態が常に地域的な色合いを帯びて薄められるが故に、逆も成り立つことになる。すなわち、ドイツは全土が田舎である。これによって、私たちは再びかの合言葉〈狭さ〉に立ち返る。

ドイツの特質として狭さに力点を置くのは、他にも幾つかの理由がある。もともと、それまた歴史的な小空間と無縁ではない。ここで簡単に注目しておきたいのは、人口密度である。ドイツでは平均すると1キロ平米当たりの人口は優に230人を数え、ヨーロッパの諸国家のなかでも上位に位置している。しかし一番ではない。オランダとベルギーは、380人と330人であり、ドイツよりもかなり高い。イギリスも240人なので、ドイツの平均より上に来る。しかし、例えばフランスと較べると、ドイツの人口密度は高く、狭いことは一目瞭然である。フランスは、面積はドイツより三分の一広く、人口はドイツより三分の一少ない。

ドイツは、人口過剰を過去に経験した。人口移動の波も、特に19世紀では、宗教的な理由や政治的立場や考え方の違いによるのは僅かであった。国を後にした人々の大多数は、故国では収入を得ることができなかつたのである。それがドイツの拡張政策の背景であった。しかしその政策は、これまたヨーロッパの枠組みからはみ出たものではなく、特に経済的な優位と政治的強者であることを目的としていた。その際本質的な役割を果たしたのは、植民地所有の比較であった。とりわけ第一次世界大戦の結果として海外の植民地を失ったことは地政学的な要求をかき立てた。1926年にはハンス・グリムの小説『土地なき民』¹⁸が刊行された。そこで示されたのは、植民地を含めた挑発的な比較であった。ベルギー人は6人で〈1000メートル四方の土地を所有している〉。同じ面積を、ロシア人は7人、フランス人は8人、イギリス人は15人、— それに対してドイツ人は132人と言うのであった。ナチス・ドイツ体制は、侵略戦争によって大ゲルマン帝国を目指し、その挙句、少なからぬ国土喪失を蒙り、膨大な数の引揚げ民が発生し、人口密度はさらに高まった。

今日、高い人口密度は、政治の次元では派生的な議論として触れられる程度である。経済活動の圏域が広がったのと、科学技術の進歩が、人口過剰の議論を相対化させたのである。狭さが話題になるとときには、むしろ日常経験のあり方に焦点が当てられている。しかしそれは、通常、特に反省的にとらえられることはなく、僅かに特殊な状況下で意識に上る程度にすぎない。これについて、筆者は、ありふれた事例、しかし筆者には問題の鍵の質をもった事例を挙げてみたい。テュービンゲンのドイツ・アメリカ研究所において、南の国の出身者である教授が講演を行なった際、筆者も呼ばれていた。しかしあいにく都合がつかず、やむなく欠席した。数週間後、筆者はフランクフルトのアメリカ会館から電話

をもらった。その教授が翌日の夕方に講演をするので、筆者にも是非とも講演を願いたいというのであった。私は、丁重に断った。しかし、本来、アメリカ人の同僚に地図を見てくれるようにと説明するのが一番よかったであろう。事情は、後になって徐々に分かってきた。つまりアメリカ人の行動の真相である。これに因んで思い出すことがある。かつてアメリカへ講演旅行に招かれたとき、アメリカの同僚たちは、空港から彼らの大学まで、自動車で4時間かけて連れていってくれた。フランクフルトへ講演に来てはとの誘いは、彼らには当然のことであった。しかしそれと同じく、私が断ったのも、文化の特殊性から来る自明性に根ざしていたのである。

フランクフルトからチュービンゲンの方が、シカゴからブルーミントンまでの距離よりも <遠い> ことを説明するのは簡単ではない。キロメートルで計れば、両者はほぼ同じであろう。その距離が建て込んでおり、多様な脈絡で埋まっていることが、たぶん関係しているであろう。チュービンゲンからフランクフルトまでの道筋には、多数の性格の異なった地域が介在している。また多数の自治体の境界を突き抜けることになる。こう言ってもよい、空間は詰まっているわけである。それに対して、USAの多くの場所では、人は <空いた> 空間を飛び越してゆく。アメリカからやって来た人々には特に奇異に映るらしいが、あるアメリカ人女子学生の言い方によると、ドイツにはそもそも広い土地がなく、どこへ行っても、あるのは村々である。

これには、もちろん異論が起きよう。北ドイツの人間から見れば、事態は全く異なると言ってもよい。ナポレオン以前にはドイツには約1000の領邦が存在したが、そのうち優に600は今日のバーデン＝ヴュルテムベルク州にかたまっていた。したがって、そこでは、政治的な境界線と国家の関係は特に狭かったのである。人口密度、建て込み方、広い空いた平地の欠如が話題になるなら、たしかに北ドイツや北東ドイツの諸州にはあまり当てはまらない。それは人口密度についての数値を一瞥すればよい。ベルリン、ハンブルク、ブレーメンの都市州を除けば、1km平方当たりの人口は、ノルトライン＝ヴェストファーレン州が527人に対して、メクレンブルク＝ポメルン州は78人である。

私は、南西ドイツから見ているが、それは言い換えればバーデン＝ヴュルテムベルク州を対置していることになる。この南西ドイツの州をアメリカ合衆国のオレゴン州と比較するとコントラストはすこぶる明瞭になる。しかし、それを直線的に一般化するわけにはゆかない。それに一口にステレオタイプと言っても、ドイツ人から見たときの自己ステレオタイプと、外国人がドイツ人を見るとき^{ヘテロ}の対他ステレオタイプがある。もとより、こうして相対化したからとて、これまでの議論の中身が否定されるわけではない。北ドイツや北西ドイツは、たしかに広い平地に疎らな集住の地方であるが、それと同時により密度の高い建て込んだ地域をも併せている。際立ってまばらな集住は一般的ではない。人口の大多

数が暮らすのは都市や村や小さな分村であり、それらは、独自な特徴を持ち、日常生活における最も重要な場所となっている。それだけでなく、狭さは、外的な諸関係においてのみみとめられるのではない。より普遍的な位置をしめている。それは、道徳的なカテゴリーと言ってもよい。従って、ドイツのなかの人口希薄な場所に暮らす人々も、それから切り離されてはいないのである。

3. 同じ所に住み続け、そして旅行が大好き

ドイツを構成する一つの州から別の州へ居を移す人は、年間ほぼ100万人である。この数字に人口と平均寿命を重ねると、ドイツ人は平均して一生のうちに一度だけ引越しをすることになる。この数字には、同一州内での転居は含まれていない。因みに、後者の場合、しばしば〈本当の〉転居であるかどうかが問われるが、それは同じ土地のなかで建て替えるだけのこともあるからである。しかしそれらすべてを場所の移動として加算しても、一生のうちに平均4回であり、低い流動性にとどまっている。もっとも、4回という平均数値が小さいと受けとめられることについて、筆者は確信をもっているわけではない。しかし、ここでもアメリカ合衆国を比較の対象にとるなら、その数値はやはり小さいのである。アメリカでは、1人住まいの人が絶えず住居を替えるだけでなく、家族の単位でも4年から5年おきに転居をする。それが普通であり、特殊な事例とみなされない。それに対してドイツでは、外的な事情で抛れ所ない場合にせよ、自発的であるにせよ、ともかく引越しかき乱されることを意味し、煩わしく、負担である。これをどう評価するかはさまざまであろうが、(部分的ではあれ)客観的な根拠を挙げることもできる。アメリカ社会には、頻繁に転居をするための仕組みができていて、家具調度の一部は置いておくができ、次の住人に引き継がれる。企業も社員の転居の費用を負担し、それまで住んでいた住居の転売について面倒を見る。官僚的な繁雑さもほどほどである(多くの場合、転居・転出の届けはされない!)。学校制度は柔軟で、子供たちにも大きな負担ではない。“Newcommer’s Clubs”は女性の入会を歓迎する。直接の隣人たちも、流入者に目くじらを立てない。これは、大規模なアパートではまったくの無名性が勝っていることを言っているのではない。ともあれ、ここに挙げた諸条件は転居を容易ならしめている前提である。同時に、引越しがきわめて普通のありふれたことがらとみなされていることの結果でもある。

ドイツでは、これらの前提は限られた範囲でしか揃ってはず、したがって引越しはずっと面倒である。しかも転居を容易ならしめる流動性はむしろ低下の傾向をみせている。引越しが自明のことがらでなくなってきたからである。幾つかの世論調査の機関は、転居への希望の動向を知るために、ときどき質問調査を行なっている。それによると、質問

に答えた人のなかで、引っ越したいとの希望を表明した人は、数年前のデータでは（これには旧東独は入っていないが）10%に満たなかった。また1997年のインフラテスト調査では、質問を受けた人の88%は現在の住環境に満足をしていると表明した。また同じ調査研究のなかでは、ドイツ人のほとんど三分の二がその成長した都市や地域に今も暮らしていることが明らかになった。さらに残りの三分の一には、戦後、強制的にふるさとを離れなければならなかった人々が多く含まれることも考慮しなければならない。これらの数値はいずれも、同じ所に住みつづける性向が極めて強いこと、またこれが〈典型的にドイツ的〉な特徴でもあることを示している。

第二次世界大戦が終って、シュトゥットガルトに再び市電が走り始めた頃、郊外へ向う電車の中に一人の老婦人が、アメリカ進駐軍の兵士の向かいに腰かけていた。兵士は黒人で私服だった。婦人は、兵士をたじろぎもせず見詰めていたが、終点に近づいた頃、意を決して話しかけた。〈貴方はここのお生まれですか〉。男は応えた、〈いいえ〉。婦人は満足そうに言った、〈道理で…〉。この話は、伝播性のある小話で、ドイツの他の場所のできごととしても語られるが、いずれにせよ過去のエポックを特徴づけている面はあろう。今日では黒人の存在も、特に大都市ではほとんど目立たなくなっている。しかし、その土地の者であるかどうかは今も意味をもちつづけている。流入については理解もでき許容もできる。しかし先ずは、〈ここの出身〉であることが期待されるのである。

同じ所に住みつづけることへの愛着は、社会的必要が〈流動性〉(Mobilität/mobility)のキーワードによって特徴づけられるだけに、一層目立ったものとなる。経済の広いネットワークは、多くの人々に、しばし、あるいは長期にわたって働く場所を移し、それと共に多くの場合、生活の中心を変える心構えを要求する。そうした心構えが常になされているわけではない。生産拠点の移動が困難と緊張につながる事例は多い。世界に広がる大企業のネットワークでは、一時的な交替だけでも問題が起きる。一週間か二週間の職場の変更を喜ぶ者は多いが、半年あるいはもっと長期の転勤となると引き受け手はめったにいない、と経営者たちは歎く。これについては流動性の欠如としてマイナス面を指摘されるのが通常である。それだけに、ある大手の自動車メーカーの社長が、企業合併のブームを批判して、この側面に言及したのは例外的なできごとであった。彼は、ふるさとを大事にするのは、地平の拡大に対して必然的なバランスをとることになる、と言う。その見解は正しい、しかしドイツ的なヴァリエーションを説明するにはなお充分ではない。なぜなら、グローバルな視野や尺度が身近な世界でも条件となっていることは、他の国でも見られるからである。アメリカもそうである。

ここで改めて、ドイツとアメリカ合衆国の違いに立ち返ろう。その理由の一つは、差異が明らかだからである。しかしまた、その差異は既に何度も取り上げられたことがあり、

要点の分析もおこなわれてきた。1980年代の半ば、アメリカの文化人類学者アラン・ダンデス¹⁹が、ドイツ人を論じた一書を著した。そのなかで彼は、堆肥や、過激な冗談や、ウィットや、詩歌に見られる野卑な傾向や、罵り言葉や、土産物の種類など、いさかか踏み外した材料の取り上げ方をし、ドイツ人の〈肛門強迫的な性格〉を指摘して、証明しようとした。直接的な因果関係を挙げないままに、ダンデスは、ドイツでは長く一般的ではあったと彼がいうところの、小児に特に窮屈で厳しい襦袢を当てる習慣と、子供に清潔であることを厳格かつ余りに早期にしつけることとの関係を強調した。ダンデスは自分の挙げた事例を歴史的・社会的な脈絡では解釈せず、また他の諸国や他の諸文化にも材料をもとめて比較することもなかったため、彼の小著は珍奇な話題を寄せ集めただけとの評価を受けることになった。それはたしかにそうであろう。しかし、そこに集められた諸事例は、悪意による列挙として簡単に片付けるわけにはゆかないものを含んでいる。ダンデスの考察における視点とはやや異なるであろうが、ドイツ人には、人間の裏面を言い立てる強い傾向があるのは確かであろう。また性的な語彙が武器にもちいられるときには、猥褻語彙への志向を見ることになる。もっとも、同じ所に住み続ける性向 (Seßhaftigkeit) とは、しっかり坐ること (Fest-sitzen)、つまり尻で抑える=所有する (Besitzen) などとまで言ってしまうと、安っぽい言葉遊びに墮するであろうが。

他方で、心理分析が正しい論拠を提示しているかどうか、すなわちドイツ人が問題の多い躰の方法のために本当に幼児期に無理なおむつの当て方をされているのかも問い直す必要がある。ミュンヘン大学のアメリカ研究者ゲルト・レイテルは、ドイツ人とアメリカ人の心性を対比するに際して、やはり心理分析の概念を用いた。彼は、ドイツ人に〈気後れによる愛〉すなわちしがみ付きを希求する動きのないタイプを、他方、アメリカ人には〈遠くへ向う愛〉すなわち流動的で境界を踏み越えるタイプをみとめた²⁰。しかしレイテルは、アメリカ人の姿勢を移民であることと結びつけ、それによって視線をしっかりと歴史的経緯に向けている。移民たちは、自己の環境から切り離され、広い〈新世界〉に幸福をもとめたのである。それに対してドイツ人は、地理的・政治的な狭さのなかで遣り繰りする他なかったと言う。エドワード・T. ホールとマイルドレッド・R. ホールは、これに加えて、ドイツの歴史に起きた転変と荒廃にも注目した。ホール夫妻によると、これによって、ドイツ人が自分の所有物にしがみつ়くことが理解されるという。なおドイツ人がしがみつ়く所有物は、拡大すると、ふるさとふるさとの村やふるさとの地方になる。

その際、ふるさとふるさととは言っても、何世紀ものあいだそこにはセンチメンタルな関係など無かったことは、ふるさとふるさとという概念の歴史が示している。19世紀になっても、ドイツの多数の領邦には、〈ふるさと権〉(郷土権)が行なわれていた。それは財産を有する人々の権利であった。具体的には、結婚する権利、職業活動の権利、支援を受ける権利であった。

逆に言うと、それ以外の人々は〈ふるさと無き者〉(無宿人)である他なかった。今その一端を挙げた諸々の権利がみとめられず、まともに足を着ける場所をもたない人々である。ようやく19世紀後半になって、工業化によって頻繁な転居が必然的となると共に、ふるさと権は廃止され、〈生業地戸籍〉²¹の原理に交替した。続いて、特定の町村体に1年あるいは2年住んだ者は漏れなく、そうした生業地戸籍を要求できることになった。それには、市民的な状況が進展したことが大きい。プライベートな場所が価値をもつ時代になったのである。家族的な生活空間への密接な結びつきができ、〈ふるさと〉の概念は情念の色合いを帯びた。それは、ふるさと歌謡やふるさと文学やふるさとクラブやふるさとミュージアムの形をとった。

しかし、ここで再び現代へ戻ろう。

ドイツ人が同じ所に住み続ける性向をしめすのに関連して、よく指摘されるのは、住まいとしての家屋の所有、少なくともアパート住居の所有が大きな意味をもつことである。これほど多額の金を住宅貯金に積み立てている国もあるまい、これほど住宅の建築と改装に金を使うところも稀であろう、と言うわけである。ところが、統計に即して冷静に数字を見ると、他のヨーロッパ諸国との比較ではドイツはむしろ下位である。ドイツでは、持ち家やアパート部屋の所有の場合、それに関係する支出は精々40%である。ヨーロッパの他の国々では、その比率ははるかに高い。イギリスやアイルランドでは、優に70%ないしは80%に上る。それゆえ、ドイツ人が何よりも自分の家を大事にすると言い立てるのは、(賞賛であれ批判であれ)現実の障害をものともしない無謀ドライバーになりかねない。もっとも、ドイツ人には暴走するドライバーの面がありはするが、それはともあれ、この統計もまた幾らか解説を要しよう。ドイツは、南の国々に較べると、多人数の家族が分解する度合い著しかった。そのため、シングルが増加し、それがまた借家や借りアパートの比重を高めることになった。住宅に関しては、伝統的に安定性が重い意味をもち、そのため住宅作りでは、安定した内部の作りも立派な物件が一般的となったが、またそうした住宅を作るには極めて多額の費用を要することになる。ドイツ連邦共和国の建設省が持ち家に関する比較統計を公表するや、建築会社側から異論が出た。家と言っても、どれも同じ家ではない、というのであるが、それもある程度は当たっている。たしかに、持ち家や住宅所有の比率の高さではドイツ人はレースの先頭騎手という流布された見解は間違っている。しかし、それはまた、持ち家への夢がいかに大きいかをも示し、夢としてのリアリティを帯びている。

同じ所に住み続けるのは、安全性を希求することの表れでもある。ここに軸を据えると、借りアパートが大きな割合を占めるのも、それに沿っていることになる。家屋やアパート住居を持つのは、最終効果から見ると、それが安全性の契機に適うからである。しかしそ

れだけに、獲得のために長期間煩わされるリスクを嫌がる人も少なくないが、それまた安全性にもとづいている。安全性は、ドイツではあらゆる分野において特筆される。ドイツでは個人として保険に加入している人の数も、その掛けている保険の金額も非常に大きい。消費者保護の諸団体がいつも指摘することだが、多くの人々は二重三重に保険に入っている。しかしそれによってもまったく安心できるわけではない。なぜなら保険会社の規約はきわめて分かり難く、また保険の空白に対する心配も大きいからである。それに加えて、他の国々に較べてドイツでは、責任の有無をめぐる問題が大きな意味をもつ。当初は意気込んでいた個々人のイニシアティヴもそのために挫けることが多い。子供のための遊び場作りや、児童の面倒をみるための様々な工夫や、さらに子供たちをドライブや遠足に連れてゆくことに個人として関わろうとしても、不測の事態を考えると、意欲は萎えるのである。

かくして、バランスシートをあれこれ探っても、ドイツ人が同じ所に住み続ける志向は隠しおおせない。それにしても、夏の数ヶ月をはじめとして、ドイツ人の半数以上が他の地方や他の国々や他の大陸へ出かけるのは、これとどう関係しているのだろう。3500万人に垂なんなんとする人々が、自分の自動車で移動する（そのなかにはキャンプとオートキャンプの人々が約500万人含まれる）。そして優に1200万人がバスや鉄道を使い、またそれと同じくらいの人数が飛行機に乗る。ドイツ人が〈旅行の世界チャンピオン〉であると、よく言われてきた。もともと、この肩書きには異論の余地があろう。旅行愛好をめぐるデータは世界中で同じ方式で産出されるわけではなく、計測の尺度はきわめて多様である。旅行者の数、旅行の回数、旅行の日数、旅行の距離、それに旅行の手段などである。例えば日本人やアメリカ人は、ドイツ人が休暇で動くときより、はるかに大きな距離を移動する。スカンディナヴィア諸国では、休暇で旅行する人の人口に対する割合はドイツよりも高い。しかしそうではあれ、ドイツ人の旅行志向はかなり高い、とは言えるであろう。人口の優に三分の二がツーリストとなると、その比率はやはり高いと言わなければならない。しかも、経済的な条件が極めて困難である旧東ドイツでもその高い比率に近づいており、そればかりか労働市場の諸問題もこれまで旅行活動にはほとんど影響してこなかったことを加味するとなおさらである。社会学者が言う〈三分の二の社会〉²²がここではとりわけ直接的に反映されていることになろう。三分の二は長期休暇中の旅行に出て、残りの三分の一は指をくわえて我慢している。やはり、休暇旅行が非常に重みをもつものと受けとめられていることになる。手元が少々不如意でも旅行を放棄しないと云ってもよい。平均すると、ドイツ人の家計では支出の十分の一以上が休暇旅行の費目に当てられる。

同じ場所に住み続けるのと旅行好き、これが対立的であることは疑えない。しかしさまざまな角度から見ると、両者は補完的な関係にある。代償的でもある。実はツーリズムの

時代が到来する前から、すでにこれが当てはまった。故郷では働き口が無く収入も見込めない多くの人々が、遠隔の地に幸運をもとめたのである。〈シュヴァーベン人と悪貨を／悪魔が世界に撒き散らす〉²³、とは早く中世末に行なわれていた言い回しである。地元にとどまれない、との陰口をたたかれたのは、もちろんシュヴァーベンの人々だけではなかった。もっとも旅行への愛好と言ってしまふわけにはゆかない。その旅行は厳しく危険であり、たどり着いた先で待っているのはたいてい窮乏と失意であった。しかし、今日のまったく自由意志によるツーリズムでも、同じ所に住み続け、しかもそこが狭い、すなわち窮屈であることによって触発された側面があると言ってよい。そのため、ひととき解き放たれようとするのである。狭く延々と続く変わることなき諸関係のなかに暮すが故に、日常の絆から自己を振りほどくのである。求められるのは反対世界である。陽光の降りそそぐ土地、美しい自然、野趣のある光景。遠くへの道をたどるだけでも、二三日あるいは二三週間だけは何かかも違うとの感情をもつことができる。

しかし、これは事からの一面である。ツーリストは自分自身の世界が詰まったスーツケースを携えて移動する。誇張して言えば、スーツケースはそれ以外ではあり得ない。中に詰まっているのは、先ず食生活の習慣である — もちろん〈ドイツ料理〉の看板はそうどこにでも出ているわけでないが、とはツーリズムに因んでよく聞くギャグである。そして最後は日頃の家事労働の一部である — ママはキャンプ場でもお皿を洗っているの、でもここならピクニックでもいいんだって。キャンプ場での休暇が広まると、ロマンティックな見方で話題にされることが非常に多くなった。自由な自然のなかの自由な生活。そうした自然への熱情が高じてテントやキャンピングカーが蝟集するや、結末は正にアイロニックと言う他ない。キャンプ場に集まった人々には集団的な社会生活が避けられなくなる。事実、彼らの大多数が求めていた（いる）のは、感情を同じくする仲間とのコンタクトに他ならなかった。と言うことは、普段と同じ暮し、しかしちょっぴり規制がゆるい暮し、である。とは言え、ツーリズムを外部から見るのと、ツーリスト自身の経験は、これまた違っていよう。肥えた、汗を吹いた沢山の肉のかたまりが浜辺に押し寄せる。〈ドイツ人の照り焼き〉²⁴である。ビーチパラソルを立てるのはまるで戦争、次に寝そべる、そしてやおら身体を起こしてゆっくり海へ入る — これが一面、それも批判者や戯画家の眼で見た一面である。他の一面は、浜辺での現実の暮しである。そこには、隣人や友人がおり、諸々の条件や区切りがあり、近接と遠隔が同居し、普段の経験としては珍しく、そこにあるのは見渡しがきく社会的な仕組みである。しかし、それは日頃の諸形態の縮図でもある。

ドイツ人ツーリストに一番のぞんでいるのは何かをたずねると、挙げられるのは、緊張からの解放、すなわち息抜きである。しかし、自然に接した感動やスポーツの次にやってくるのは、他の人々との共存であり、新しい知り合いである。もちろん、休暇が終ると、

それらの人々は視界からも心からも消えてしまう。彼らが、一時の隣人に過ぎず、ふるさとでのプライベートな暮しが乱されないのを、ドイツ人ツーリストはむしろよいことと受けとめている。しかしドイツ人の傾向として目を惹くのは、休暇で訪れるのが、同じ場所、少なくとも同じ地域のことである。テシン（スイス中部の都市）やトスカナ（イタリア中部）が第二のふるさとであるのは、そこにセカンド・ハウスを持っている人々だけではない。そこに特にしがらみの無い多数の旅行者でも、それは似ている。となると、〈旅行者〉という言い方がそもそも問題でもある。外国の多くのツーリスト、とりわけヨーロッパ大陸以外のツーリストは、ある土地から別の土地へ、名所から名所への移動するが、ドイツ人は移動距離が大きいにせよ、休暇の期間、別の場所で日頃の同じになることをもとめている。ひととき、同じ所に住みつづけるのである。

4. くつろげるのが何より

〈寛^{くつろ}ぎ〉（Gemüt）という言葉はあまり使わなくなった。誰かを指して、彼あるいは彼女はゆったり屋（Gemütsmensch）だ、あるいは単にゆったりしている（schlichtes Gemüt）と言うと、それは、温かさを意味するより、むしろ鋭敏な理解力の欠如を指している。〈寛厚な〉（gemütvoll）も改まった言い方で、用いられるのは、例えば追悼の辞である。しかし〈くつろいだ〉（gemütlich）という言い方は不可欠である。コマーシャルでもありとあらゆる商品にとって、この語は無いわげにはゆかない。日常生活でも同様に、多くのものが〈くつろげる〉と言い表される。因みに、若者の言葉遣いについて、往々、語彙の乏しいことが指摘される。〈すげえ〉（geil）、〈いかす〉（cool）などを用いて様々な表現可能性を節約することなどであるが、その点では大人も決して勝っているわけではない。〈くつろげる〉は、価値付けと状況の幅広い範囲をカヴァーするのである。しかしく^{くつろ}ろ^ぎ（Gemüt）から派生するあらゆるものを否定するのではない。く^{くつろ}ろ^げる（gemütlich）のは、く^{くつろ}ろ^ぎに関係するもの、すなわち、特別の作業を前提とせずに満足と良き雰囲気を解き放つところのものである。快適が意味されるだけでなく、居心地がよいこと、特殊な情感結合が作り出す〈ふるさとらしい〉雰囲気である。

くつろいだ気分（Gemütlichkeit）には、ノスタルジーの契機がひそんでいる。それは後退と閉鎖を前提とする。前節の〈狭さ〉のテーマへの傍証をここで取り上げる必要はあるまい。く^{くつろ}ろ^げるとはどいいうことか、それらしい嫌疑を手がかりに疑わしきある空間を追ってゆくと、着地点はひたすら小さな場所へ入りこむ。くつろげるのは住宅区画ではなく、住家屋である。しかし住家屋の全体ではなく、そのなかの自宅である。しかし自宅の全体ではなく、隅ベンチあるいはソファを置く片隅である。それとまったく照応して、

くつろげるのは庭の全体ではなく、庭の一隅あるいは半屋根に隠れた亭^{あずまや}である。そうした空間にはまた古くからの名残りが付属する。暖炉、淡いランプの灯り、ソファ枕、室内着とスリッパ。

庭の置き物としての陶器製の矮人形^{こびと}もその一つで、ささやかな前庭を、風景的にも愛らしいミニチュアに変化させてくれる。もともと、ドイツのメーカーの悩みは、それらが近年、幾つかの隣国で大量に生産されることである。しかしその主要な購買者は相変わらずドイツ人である。もちろん庭の置き物の矮人形はドイツ人の独占物ではなく、くつろぐのもドイツ人だけではない。イギリス人の居室でも、古めかしい家具やあちこちに天鵞絨(ブラッシュ)によって“cosiness”の情感がつけられる。フランスの“bien-être”もくつろげる内装に負うところが大きい。くつろぎが典型的にドイツ的のみならず、それは厳密に国境線で区切られるとか、他国では同じ現象が起きないとかの意味ではない。他の国々より、ドイツではそれが愛好される度合いが高く、またそれに照応する客観的な指標がおそらくより頻繁に目につくに過ぎない。

19世紀末、哲学者フリードリヒ・テオドル・フィッシャー²⁵は、<くつろいで過ごす人生>に反撥した。それは<まことに呪わしく>、嫌悪を掻き立てる、と言う。その際、フィッシャーに特殊だったのは、自分の属するシュヴァーベンの人々を念頭においていたことである。しかし少々割り引くと、この判断は、ドイツ人全体にまで拡大することができる。フィッシャーが挙げるその理由も同じである。<社会ではない、つまり、飲食会館でただらと坐っている仲間の集まりは社会ではないということだが、そこでは深い議論をすることもない…… 都会に行き交う新しい品物が浸透することもない>。この欠陥はなお作用しつづけている。会話がないのである。弁舌がドイツ語では“Eloquenz”という外来語として続いてきたのは、偶然ではないのではなかろうか。ドイツ語に訳すと“beredt”（流暢）であるが、これはいかにも澄ました技巧性を意味するであろうし、逆に“schwatzig”（お喋り好き）はネガティブな感じでよく使われる。この語感はいずれも政治の分野において跡づけられる。19世紀もそうであったが、その後もヴァイマル共和国の国会は<お喋り屋台>（Schwatzbude）と呼ばれたものである。

ドイツの場合、18世紀の後半に機能性と市民性をそなえた公共の場が形成された。西ヨーロッパの諸国に較べるとやや遅れてはいたが、活発であり、政治的にも意味をもった。最初の雑誌や新聞が公共の諸問題を論じた。その議論は、読書グループやクラブ団体やコーヒー・ハウスへ持ち込まれて活発な会話となった。しかし政治は反動の季節を迎えた。国家の政策が主導的となる度合いが強まり、市民社会はお上がつくった枠組みに合わせていった。かくして議論は鳴りをひそめた。結果とは無関係で無意味な<床屋政談>²⁶に墮したと言ってもよい。議論はしても、政治の現実にはまるで結びつかなかったのであ

る。

19世紀を通じて、家庭生活は新しい質をもつようになった。農民の家政、さらに都会の職人のあいだでも、家庭生活は仕事に組みこまれていった。畑地や厩舎に必要な設備、ないしは職人の場合は製作や修理などの注文が女性と子供の日常をも決めていた。昔の職人部屋の絵を見ると、親方は仕事をし、女房は顧客の相手をし、年長の子供は父親を手伝い、幼い子供たちは同じ部屋の中で遊んでいる。つまり、家族全員が、仕事に向けた一体性をかたちづくっている。もちろん、かかる図式からはみ出すことも少なくない。商人は朝早くから事務所へ出かけ、役所の書記は終日書き物机で過ごす。彼らは、家族を後にして出かけては帰宅する。これが19世紀を通じて、ますます決まった類型となっていった。官僚主義も広まった。商業機関や金融機関も拡大した。職人の小さな工房は拡大して工場となり、巨大な工場が膨大な数の労働者をあつめるようになった。女性が外部の生産現場につながとめられることも稀ではなくなり（市民の家庭はそうではなかったが）、その点で明瞭な機能分化が発生した。家屋やアパート住居は家庭となった。言い換えれば、そこは主婦の管理にかかるあらゆる再生産活動の場所となった。カーリン・ハウゼンは、〈性差による二極化〉と呼んだが、主婦には、家中の空間を乱雑ではなく良き調和にととのえ、かつそれを保つことがますます多く期待されるようになった。今日ではアイロニーをこめて批判的に言われることだが、主婦の担当分野は3Kであった。子供（Kinder）、台所（Küche）、教会（Kirche）である。つまり、教育、食事とその他の家内仕事、最後に生活における情感の側面であり、そこで重要な意味をもったのがくつろぎであった。

かかる推移は、決してドイツだけのことではない。労働の分離、大規模な生産拠点、官僚主義を伴う近代的な構造が形成された国々や社会ではどこでも必然的な趨勢であった。しかし、その一般的な趨勢に特殊ドイツ的なアクセントと深甚な影響をあたえたのは、市民的な公共の場の不在であり、それは、人間がプライベートな美德を遂行することへと押しもどされる事態を結果した。19世紀のフランス文学をドイツ文学と比較すると、ただちに明らかになるように、ドイツ文学を貫流するのは諦念であった。フランスのリアリズム作家たちは、その長編小説において公共の諸問題、さらに政治の諸問題と取り組んだ。それに対して、ドイツのリアリズム作家たちは、身分社会のプライベートな揉めごとに引きこもり、あきらかな満足と分かりやすいユーモアをこめて、登場人物たちの小さいながらも心地よい、そしてくつろげる家庭世界を描き出した。彼らの作品には、いみじくも〈詩的リアリズム〉のレッテルがつけられてきた。その〈詩的〉の意味するのは、大きな社会的な諸問題はかすんでしまっており、あるいは身丈にあった間尺すなわちプライベートで家庭がかかわるような尺度に引き戻されていることであった。ドイツ文学のなかにも、それとは違ったラディカルな志向があったことは看過すべきではない。しかし、

それらはいわばアウトサイダーであり、同じくらいの反響を呼ぶことはなかった。

くつろいだ気分は、ドイツ人がプライベートなところへ引きこもったことの現れであり、その特殊な色合いでもある。くつろいだ気分が中心になる多くの歌謡がある。小さな気の置けない仲間が描かれることもあれば、ほっとするくつろぎに特別の価値が付与されることもある。〈くつろげるのが何より〉、これは19世紀末の歌謡の歌い出しである。しかしこの歌が、歌謡集ではあまり印刷されなかったのは、何故ほっとするか理由を挙げる2行目が、若者らしい澆刺としたものではなかったからである。〈パパがママのベッドへ行ったのだから〉。しかし、現実には、この歌は昔も今も歌われることが多い。

19世紀の祭りの展開をたどると、くつろぎという気分が段階を追って形成されたことが明瞭になる。特にドイツ帝国が成立してから、一連の国家的な祭日と祭り行事が決められていった。しかし他面では、伝統的な祭りが〈家庭の行事へ〉の道をたどり、最後はまったく家庭の圏内へ入ることになった。祭り暦の節目を見ると、その推移が読み取れる。復活祭は19世紀になるまでは、何よりも教会堂における祭儀であった。たしかにそのときには、隣人や友人や村の同僚と一緒に祝いをし、それゆえ大きな人的結合のなかで執り行なわれた。しかし、やがて家庭化が始まった。イースター兎²⁷が子供たちに色付けした卵をはじめとするプレゼントを持ってくるようになった。プレゼントがもたらされる先は、家庭の子供たちであり、もはや町村全体の子供たちではなかった。かかる趨勢がより鮮明にうかがえるのは、クリスマスの変化であろう。クリスマスは、時期的に労働の中休みに当たり、厳寒の時節でもあるため、野外で楽しむのには向いていず、かなり早くから家屋内の要素が現れていた。中心は教会堂への参集であるが、それを済ませると、農民の家庭では下男や下婢も一緒に集まるのであった。しかしなおクリスマスは家庭の祭りではなかった。そうなるのは、ようやく19世紀であった。教会堂でのミサ、大勢の人々を前にした歌唱団体による唱歌、さらに村あるいは都市の全体に関わるその他の行事次第、これらが後退し、家庭の祭りが前面に出た。家族でクリスマスの歌を二三曲歌い、子供たちは覚えた詩を厳しいお父さんの前で暗唱し、それが終ると、プレゼントめがけて殺到する運びになった。そこで繰り広げられるのは、もはや本来の意味でのクリスマスではない。ウーツ・イェクレの表現を借りると、くつろぎの儀式化であり、それによって〈市民の理想的な家庭〉を演出するのである。

くつろぎという理想は常に家庭に限定されるわけではない。あるいは、^{ファミリー}家族は家庭だけではない、と言ってもよい。ドイツ語には、かなり大きなまとまりをも家族として理解する傾向がある。近しさ、調和、そしてくつろぎの原理を社会的な諸形態に引き入れるのである。したがって、それらは家族よりもずっと複雑で、メンバーもまったく固定しているわけではない。その最もよく知られた事例は〈クラブという家族〉で、今日ではあらゆる

る祝辞で謳われるほどではなくなっているものの、なお目指すべき価値とされている。団体は、目的のための結合以上のものであるべきとされ、同じ利害関心をもった人間の結集の形をとるといったもの以上とされる。クラブのなかでは、帰属感情もできてこなければならず、またそれがそのときどきのクラブの目的を崇高にする。それゆえ、クラブの生活におけるくつろげる情感の側面は、クラブが取り組む特殊な活動と並んで大事であるとされる。〈企業家族〉は、工業化の初期に手職者の組織を現実の背景とした概念であったが、今もそれは死に絶えてはいない。祭りの昂揚した雰囲気の中なかでは、都市あるいは州の全市民が〈大きな家族〉と謳われることも少なくない。

これらの諸事例において繰り広げられるのは、〈ゲゼルシャフト (社会)〉に対抗するものとしての〈ゲマインシャフト (共同体)〉である。ゲマインシャフトは、組織化や目的設定によって成り立った結合ではなく、原初的であるとされる。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの対比は19世紀末に社会学者フェルディナント・テンニエス²⁸によって原理とされ分析が加えられたが、ドイツ人の社会観念の中なかでは、なお重要な役割を果たしている。その際、ゲマインシャフトは有機的にして生成したもの、他方、ゲゼルシャフトは組織され作られたものとされる。すなわち、ゲマインシャフトは常に存したとみなされる。原初性のかかる強調が、ゲマインシャフトをめぐるドイツ的レトリックを、アメリカで形成された現代のコムニタリズムとは異なったものとしている。後者は、個別化とエゴイズムに対抗する活動を繰り広げるのであり、それゆえその立脚点はくつろぎではない。